

氏名(本籍)	三 鈺 泰 代 (静岡県)			
学位の種類	博 士 (心理学)			
学位記番号	博 甲 第 5862 号			
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	幼児期の子どもを持つ親の養育スキルに関する研究			
主査	筑波大学教授	博士(心理学)	濱 口 佳 和	
副査	筑波大学教授	博士(心理学)	庄 司 一 子	
副査	筑波大学講師	博士(心理学)	佐 藤 純	
副査	筑波大学教授	教育学博士	櫻 井 茂 男	

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本論文は幼児期の子どもを持つ親の養育スキルに焦点を当て、以下の3点を明らかにすることが目的とされた。①幼児期の子どもを持つ母親・父親の養育スキル測定尺度を作成する、②親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連を検討する、③親の養育スキルと関連する要因を明らかにする。以上の目的を明らかにするために、9の研究が実施された。

(対象と方法)

本論文では、幼稚園・保育所に2歳～6歳の子どもが通っている親を対象とした質問紙調査が主に行われた。目的①を明らかにするために、3つの研究が行われた(研究1～3)。研究1、2では新しく作成された養育スキル測定尺度と幼児用親子関係検査などが合わせて実施され、研究3ではこれら尺度と親子の相互作用場面における行動観察が行われた。目的②を明らかにするために、2つの研究が実施された。ここでは、両親対象の質問紙調査が行われ、研究3までで開発された養育スキル尺度と、子どもの行動傾向を測定する尺度(CBCLなど)が実施された(研究4、5)。目的③を明らかにするために、4つの研究が行われた(研究6～9)。ここでも、両親を対象とした質問紙調査が行われ、養育スキル尺度に加え、子どもの乳児期の気質(研究6)、自尊感情、怒り、情動コンピテンス(研究7)、仕事観(研究8)、スピルオーバー効果、夫婦関係、両親の友人関係(研究9)などが4つの研究に分けて測定された。

(結果)

目的①については3つの研究が行われた。研究1では幼児の母親向けの養育スキル尺度を作成し、その因子構造と信頼性が検討されたが、研究2でこれにさらに改良を加え父親の養育スキルも含めて測定できる尺度を開発、その因子構造、信頼性、幼児用養育態度尺度との併存的妥当性が検討され、十分使用に耐える尺度であることが実証された。研究3では母子相互作用場面での母親の養育行動との関連が実証された。

目的②については、2つの研究が行われた。研究4で、共分散構造分析によって、父母の親育不安、父母の親の養育スキル、子どもの行動傾向の3者間の関連が検討された。その結果、①父母に共通してスパニングと援助的コミュニケーションが子どもの向社会的行動を増加させること、②父親の感情的叱責の少な

さと援助的コミュニケーションの多さは子どものひきこもり傾向と攻撃行動と関連があることなどが明らかにされた。さらに研究5では、養育スキルの使用傾向によって、父母をそれぞれ3パターンに分け、この組み合わせによって父母のペアを類型化し、両親の養育スキルの類型による育児不安および子どもの行動傾向の差が検討された。その結果、父母とも攻撃や叱責が多い類型では、父母の育児不安が高く、子どもの向社会的行動が少なく、攻撃行動が多いことなどが明らかにされた。

目的③については、4つの研究が行われた。研究6では子どもの乳児期の気質と父母の養育スキルとの関連が検討され、乳児の「感受性」、「周期性」などが父母の養育スキルの使用と関連することが明らかにされた。研究7では、親の特性ならびに心理社会的不適応と養育スキルとの関連が検討され、父母の自尊感情、怒り、情動コンピテンス、抑うつ傾向が養育スキルの使用に関連することが明らかにされた。研究9では、ネガティブ・スピルオーバーは感情的叱責の使用を促進し、ポジティブ・スピルオーバーは、ネガティブな養育スキルの使用を抑制し、ポジティブな養育スキルの使用を促進することが明らかにされた。研究10では父母に共通して、良好な夫婦関係・友人関係とポジティブな養育スキルの使用に正の関連が、子どもへの「身体的攻撃」と負の関連が見られることなどが明らかにされた。

(考察)

本論文により、幼児を持つ父母の養育スキルを網羅した信頼性と妥当性を備えた尺度が開発されたと言える。また、この尺度によって測定される父母の養育スキルと幼児期の子どもの行動傾向との関連については、「感情的叱責」が幼児のネガティブな行動傾向と正の関連があること、「援助的コミュニケーション」が幼児のポジティブな行動傾向と正の関連があることなどの新しい知見が得られており、これらの知見は向社会的行動の増加、ひきこもり傾向や攻撃行動の軽減など、それぞれのニーズに合わせて親の養育スキルを高めていく指針として活用できることが示唆された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

「感情的叱責」や「身体的攻撃」など、抑制することで始めて「スキル」と呼べる養育行動の概念上の位置づけには検討の余地があるが、母親のみならず父親にも適用可能な信頼性・妥当性を備え実用性の高い養育行動の尺度の作成に成功した点は評価できる。特に従来の養育行動研究ではともすると母親のみのデータに依存しがちであったのが、本論文の多くの研究において、父親からもデータを取り、父親の養育スキルに関するエビデンスを少なからず得たことは高く評価できる。本研究で得られた父母の養育スキルと幼児の行動傾向との関連についての一連の知見は、ペアレント・トレーニングを始め、親の養育行動の適正化プログラムを作成する際の指針を提供できるものと思われる。また、父母の養育スキルの使用には、子どもの乳児期の気質、父母の人格特性や心理社会的適応、仕事によってもたらされる正負の心理的要因によって左右されることを明らかにしたことは、育児をする親の生活環境・職場環境を適正に整えてメンタルヘルスを良好に維持させることの必要性を広く社会に訴える上で有効であろう。今後は「遂行欠如」と「スキル欠如」などスキルの実行に乏しい親をさらに細分化してその特徴を明らかにすることが期待される。

論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(心理学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。